

---

# 忠誠の果てに

煌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忠誠の果てに

### 【Nコード】

N1548F

### 【作者名】

煌

### 【あらすじ】

ミケーネ共和国、陸軍第一部隊隊長ログは、その日空を見ていた。平和な国、平和な日常。それはまだ哀しいお話の序章でしかない。

## 青い空

『忠誠の果てに』

乾いた風が街に吹く。

秋の終わりがそろそろ見えそうな11月。

ミケーネ共和国陸軍第一部隊隊長ローグは、その日空を見ていた。

ミケーネ共和国は人口一億を超える大国で、海に面した豊かな国土で農業を営む静かな国だった。

勿論、そんな国に陸軍など必要はないのだが、国防の要として設置されている。

陸軍は他国との地上戦や密偵、破壊工作などを主とし、腕っ節に自信のある者たちの集団だった。

だが、こんな平和な国だ。

陸軍の必要となるようなことなど起こらない。

それ故、普段陸軍は交通整理や事故処理、福祉活動に従事している。

無論、最初からこんな平和だったのではない。

つい何年前、ミケーネ共和国は隣国と大戦が絶えない危険な国だった。

この平和を得るために、何年の歳月が流れ、また何人の犠牲を払ったのか分らない。

ローグはその射撃スナイプの能力の高さを買われて第一部隊に編入した。

数年の後、何人も同士を失い、終戦を迎えた。

心に癒えることの無い傷を残して。

「隊長？」

いきなり背後から呼ぶ声がした。

執務室の隊長専用イスをくるり、と回転させて振り向く。

と、

「ファイ補佐官」

そこにいたのはログの片腕とも呼べる、リリア・ファイ補佐官だった。

普段の業務を取り仕切り、仕事をサボりがちなログを支える優秀な補佐官。

彼女もまた数多くの大戦をくぐり抜けてきた戦闘員だった。

しかし女性が軍上層部に食い込むことは難しく、風当たりの強い第一部隊だったため、彼女はログの補佐官として共に働くことにしたのだった。

「お仕事の方は終わったのですか？」

「いや、今日は空が青いと思って。」

そう言われてファイは空を見た。

透き通った空に、白く薄い雲が浮いていた。

「秋だからですね。」

「それだけか？」

ファイが窓から乗り出していた身を室内に戻そうとした、その時。

「！」

唇を霞めた何か。

求めたのはどちらか。

執務中です

今更な補佐官の発言に  
サボり性の隊長は

軽く微笑んだ。

t o b e c o n t i n u e . .

## 青い空（後書き）

こんにちは、煌です。      今回は「忠誠の果てに」を読んで下さり、誠にありがとうございます。 orz      私は軍とかそういうったモノに詳しくないので、細々した間違いなどは目を瞑って下さいませ。      ちゃんと続くかは分かりませんが、これからも宜しくお願ひしますorz

分かってる(前書き)

第二話になります。

分かってる

いつからだろうか。

彼を、ただの上司ではなく、一人の男性としてみるようになったのは。

リリア・ファイはその日、大した仕事もなくただ窓の外を眺めている自分の上司を見ていた。

ログ隊長リリア・ファイはその日、大した仕事もなくただ窓の外を眺めている自分の上司を見ていた。

ログ・モルツ隊長。自らが補佐する、ミケーネ共和国を守る陸軍の隊長。

「空が青いなと思って」

何を当たり前な事を言っているのかと思い、窓の外を覗けば、確かに綺麗な秋空。

「秋ですから」

思った事をそのまま口に出せば、漆黒の瞳が近づいてきた。

そのまま柔らかな口づけ。

誰もいないから良かったものの、彼は気にする風もなくまた書類に目を通し始めた。

私がどれ程赤くなったことか

私は免疫が有るわけじゃないし、第一不意をつかれたのだから、いくらなんでも恥ずかしい。

そのまま携帯している銃を抜き、その心臓を撃ち抜きたいくらいだ。でも、そうしないのは

……そうしない、のは。

………言わずにいきましょう。

きつと、貴方はそれに気付いているでしょうから。

私がひとりで抱えている訳じゃないでしょうから。

ね、隊長？

その日の帰り、私は隊長から大事な話があると言われ、夜遅くまで残業をしていた。

彼がそのように私を引き留めたことは今までに二回しかない。

一度目は昇進の祝いに。

二度目は長期休暇の前に。

彼は個人のことではあまり興味をひかない人だけど、部下の時は別らしい。

この前なんて、部下の一人が誕生日だっていうだけで宴会騒ぎ。

その前は娘のいる部下の話で盛り上がっていて残業をくらいました。  
(もちろん私がやらせました)

前まではそんなに気にかけていた風にも見えなかったのですが、  
この頃は結構スキンシップをとっているようにも思えます。

何かあったのでしょうか。

別に私が気にかけることでもないのでしょうか。

仕方、ないでしょう？

t o b e c o n t i n u e . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1548f/>

---

忠誠の果てに

2010年12月29日21時39分発行